慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ワルトラウド・ザイデル・ホェップナー著 ウィルヘルム・ウァイトリング：ドイツ共産主義の最初の理論家および煽動者
Sub Title	Wilhelm Weitling, der deutsche Theoretiker und Agitator des Kommunismus, by Waltraud Seidel-Höppner
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1961
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.54, No.11 (1961. 11) ,p.1026(94)- 1031(99)
JaLC DOI	10.14991/001.19611101-0094
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19611101-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ワルトラウド・ザイデル・ホェップナー著
『ウィルヘルム・ウァイトリング
——ドイツ共産主義の最初の理論家および煽動者』
(Waltraud Seidel-Höppner; Wilhelm Weitling, der deutsche Theoretiker und Agitator des Kommunismus, SS. 206. Dietz Verlag, Berlin, 1961)

飯田鼎

「プロレタリァートが、階級として形成されるほど充分に発展せず、従ってプロレタリァートのブルジョアジーとの闘争が、未だ充分に政治的な色彩をおびていない限り、また生産諸力が、プロレタリァートの解放と新しい社会の建設に必要不可欠であるところの物質的な諸条件を予見させるほどに、ブルジョアジー自体の内部で充分に発展しない限り、これらの理論家たちが、抑圧された諸階級の欲求にそなえてそれにこたえるため、もろもろの体系を一時のまにあわせにつくり、社会を再生させる科学を追求する空想家であるにすぎない……。彼らが科学を探求し、もろもろの体系だけをつくっているにすぎないかぎり、彼らが闘争の端緒にある限り、彼らは貧困のなかに貧困だけをみて、そのなかに、やがて旧社会をくつがえす革命的破壊的側面を見ないのである。(1)」

マルクスは、「哲学の貧困」のなかで、空想的社会主義者について以上のようにのべているが、このことはとくにウィルヘルム・ウァイトリングの場合いっそうあてはまるのではなかろうか。空想的社会主義者といえば、われわれは普通に、イギリスのロバート・オーエン、フランスのシャール・フーリェおよびサン・シモンをあげるのが常であるが、ウァイトリングは理論的な面で、いわゆる空想的社会主義者とはどの点が異なるのか、そしてまたどのような点で類似性・共通性が見出されるのか、そしてとくに、科学的社会主義の成立への貢献を、いかに評価すべきか、こうした興味ある問題をとりあつかったのがすなわち本書である。

本書は、第一部生涯と活動、第二部理論および第三部ウァイトリングの歴史的意義の三部にわかれている。第一部は、共産主義者への途、ドイツ・プロレタリァートの政治的成長をめぐる闘い、ユートピアと労働運動の三章から成り、また第二部は、歴史観、社会批判、階級闘争と革命について、共産主義社会の四章から成っている。そして第三部は結論でウァイトリングの共産主義思想および活動の歴史的意義を強調しているのである。

ウァイトリングの社会主義思想とその労働運動史における意義については、早くからマルクス・エンゲルスの著作以後、カーラーの研究(2)をはじめ、シュリューターやメーリングの著作(3)によっても知られている。だが今日、ウァイトリングの業績が改めて評価されるのは、どのような理由によっているか。著者は、この点について本書の序文につぎのようにのべている。

「十九世紀半ばのヨーロッパにおけるプロレタリア階級の運動の主要な問題は、ブルジョアジーの成長からプロレタリァートのイデオロギー的・組織的な解放であった。ドイツにおいてとくに目立っていた——というのは、ブルジョア・民主主義革命の前夜にあったドイツは、ブルジョア革命の時点において、フランスおよびイギリスにおいてよりもいっそう発展したプロレタリァートをもっていた——ところのこの課題の解決のために、ウァイトリングは、偉大なそして忘れることのできないことをなしとげた。彼は、その時代の進歩的な労働者が、その周囲にあつまったところの労働者階級の共産主義（Arbeiterkommunismus）の最初のドイツ的なプログラムをつくり出した。」

このような認識に立って著者は、ウァイトリングの革命的側面とその限界を検討すると同時に、その思想の空想的性格にたいする右翼社会民主主義もしくは改良主義の一方的な解釈——たとえば、彼のマルクスおよびエンゲルスとの不和の面の強調——に反対している。

ウィルヘルム・クリスティアン・ウァイトリングは、一八〇八年十月五日、マグデブルクで生まれた。彼の母は、女料理人のクリスティアーネ・ウァイトリング、父はフランスの士官テリジョンであって、ナポレオンのロシア侵入とともに両親の同棲生活は終わり、彼はいわゆる私生児としてのこされたのである。学校を終ったのち、婦人服裁縫師となり、一八二八年プロイセンを去った。そしてこの裁縫師となったことがやがて共産主義への眼が開かれることになるのである。というのは、当時の職人は、技倆を磨き、一人前の腕をもつ職人になるために各地をわたり歩き、ドイツ国内はもちろん、その行動範囲は遠くフランスやスイスにまで及んだといわれている。

著者は、一八三〇年代のドイツの状態について、(一)資本主義が発展しつつあったとはいうものの、三〇もの専制君主による小邦分立、(二)没落しつつも圧倒的な比重をしめて残存する家内手工業とそのもとで働く貧困におとしいれられたプロレタリァートとして特徴づけている（SS. 11—14）。しかしこのようなひどい状勢のもとで、ついに一八三〇年のフランス七月革命の影響をうけて、ドイツのプロレタリァートによる最初の自然発生的な蜂起がおこった。すなわち、アーヘンおよびオイペンにおける機械破壊、ベルリンにおける仕立工の騒動、そしてさらにザクセン、とりわけ、ライプツィヒやドレスデンにもはげしい騒擾がもち上り、ドイツにも民主主義運動とともに労働運動の波がおしよせたのであって、当時ライプツィヒのホェップナー・ウァルザッハ婦人服店（Höpner & Walsach）で仕立工として働いていたわがウァイトリングもこれを目撃した。しかしこの当時は彼はまだ社会主義や革命についてあまり関心がなかったようで、彼が社会主義者の影響をうけ階級意識にめざめたのは、一八三二年ライプツィヒからドレスデンに移り、さらに一八三四年にウィーンにゆき、ついに一八三五年十月パリについて、そこ

で「亡命者同盟」(der Bund der Geächteten) に入ってからのことであった。

著者によれば、当時のヨーロッパの革命と社会主義運動のいわば〝メッカ〟ともいうべきパリにおいて多くの秘密結社には、二つの政治・社会的な流れがあった。つまり、ひとつは、多くの支部においてブルジョアジーによって指導される社会主義的な運動と、いまひとつは、共産主義的な労働者の運動であるというのである。この考え方は、ガローディの著書からの引用であるが、前者は主として、サン・シモン学派およびフーリェ派の人々を意味していた。まさにエンゲルスが指摘したように、「資本主義的生産の未熟な状態、階級の未熟な地位に照応して、未熟な理論が生まれた」[4]のである。これらのユートピアのほかに当時のフランスでは、ブルードンやルイ・ブランのような階級調和論者や、共産主義を代表する者としてはカベー (E. Cabet) のようなユートピアンがいた。

ところが一方これに反して、フランス共産主義の革命的な二つの潮流は、バブーフ (Babeuf) およびその弟子ブォナロッティ (Buonaroth) によって代表されるジャコバン主義的な影響の上に立つ共産主義で、ラポンネレー (Laponnerayе) およびラオーティエール (Labautière) のように、フランス革命の自由と平等の理想という合理主義的な方法によって、共産主義社会を実現できると信じていたグループと、デザミー (Dezamy) やブランキ (Blanqui) のように、唯物論的な共産主義に立って、人間に、幸福と友愛をもたらすためには、社会組織は根底から破壊されなければならないといういわゆるフランス労働者共産主義 (der französischen Arbeiterkommunismus) とがあったが、後者こそ科学的社会主義にもっとも近い立場に立っていた (S. 19)。

著者によれば、当時のフランス共産主義運動に特徴的なことは、それが帝制打倒と共和制樹立のブルジョア・デモクラシーの運動と奇妙に交錯していた事実であって、たとえばネオ・バブーフ派の人々によって組織された労働者教育のための秘密結社「人民の友」(„Freunde des Volkes") および「人権擁護協会」(„Gesellschaft der Menschenrechte") は、共和制のための闘いをプロレタリアートの社会的目的と結びつけようとしていた (S. 20)。こうしたなかで一八三八年以来、ブランキおよびバルベ (Barbès) の指導のもとにおこなわれた非合法な四季協会 (la société des saison, Gesellschaft der Jahreszeiten) が生まれ、これと緊密な連絡のもとに、一八三四年、ドイツの亡命者によって建設された民主主義的・共和主義的団体「亡命者同盟」が結成されたが、さらに、一八三六年、革命的な分子が「正義者同盟」(„Bund der Gerechten") を建設したのである。ウァイトリングが「亡命者同盟」の一員であったことはさきにのべたが、このように空想的社会主義、共産主義そして共和主義と、さまざまの思想が渦巻き葛藤するフランスの、しかも「ヨーロッパの革命の中心」ともいうべきパリーでの生活が、彼の生涯の決定的時点になったことは疑いえない (SS. 20—21)。すなわち共産主義者になったのである。そしてこの「同盟」の会合での活潑な討論とはげしい勉強によって、ついに処女作「人間性——そのあるがままのそしてありうべかりしものとしての」(„Die Menschheit, wie sie ist und wie sie sein sollte") を秘密出版し、これによって、ドイツにおける最初の共産主義理論家となったのである。

著者によれば、この小冊子は、私有財産、貨幣および商業の批判において、フーリェおよびプルードンの影響がみられるが、しかし、社会変革の問題では、フーリェやルイ・ブランを拒否した (S. 23)。ただ彼の場合、バイブルをもって「革命の方法のハンドブック」とするというのちのメシア思想への傾斜の萌芽がみられたのが特徴的であった。以上のように、第一章において著者は、ウァイトリングの共産主義に到達するまでの経過についてふれているが、「第二章ドイツ・プロレタリァートの政治的成熟をめぐる闘い」においては、ウァイトリングが、とくにスイスにおいて勢いを張っていたマッジニーらのブルジョア青年運動の猜疑やフーリェ主義者との理論的対立に悩みながらも、シモン・シュミット (Simon Schmidt)、アウグスト・ベッカー (August Becker) などの同志とともにパリーの例に倣って「同盟」の支部をつくるべく奮闘したのである。ただウァイトリングの思想の空想的性格を象徴するものとして「共産主義にもとづく給食所」(kommunistischer Speiseanstalten) の開設が注目される。労働者による共同体的な制度の役割にたいする過大評価、そしてその結果は、労働者階級を階級闘争からそらすこととなったのである (S. 32)。彼は、スイスを中心に、ドイツ人労働者を組織し、一八四一年彼らを煽動するために「若い世代」(die Junge Generation) という雑誌を刊行し、翌一八四二年には、「調和と自由の保証」(Garantien der Harmonie und Freiheit) を出版した。「第三章ユートピアと労働運動」においては、ウァイトリングの根本的思想ともいうべきルンペン・プロレタリァートの役割の重視、アナキーの礼賛、メシア思想への共鳴の結果としての労働者階級からの遊離、こうした点についてふれているが、つぎにウァイトリングの理論について、著者の云うところをきこう。

第二部の理論篇は、「調和と自由の保証」のきわめて詳細な紹介と批判で、非常に興味深い。「第一章歴史観」では、著者は、「フランス啓蒙思想の根強い影響を指摘し、人間社会の歴史的視点として、「自己保存の衝動」(Selbsterhaltungstrieb) をとりあげ、「人間の欲望が、自己保存の衝動に相応し、それらは、社会秩序の本源的運動の要素である」として、欲望の三つのグループ、知識欲、獲得欲および享楽欲を区別し、これらが、科学、生産および消費に具体化されるというのであって (SS. 83—84)、さらにこれらの欲望と、社会の生産に結晶化される能力との交互作用、弁証法的な発展を社会的な原動力としている。著者によれば、このような社会発展の基礎としての衝動についてのウァイトリングの思想は、フーリェ主義の影響をうけたものであるという (S. 85)。自己保存の衝動の重視、人間

の需要と社会の能力との弁証法的な関係についての認識、自然条件の重視、これらは啓蒙主義とフーリェ主義からくるものであるというのである。とりわけ啓蒙主義の決定的な影響とみられるものは、人間社会の発展を、㈠原始状態の時期、㈡不平等と奴隷制の時期および㈢財産共有の時期という時期区分である。しかし著者が、ウァイトリングの思想においてもっとも深い関心を示したものは、社会批判であり、本書のなかでもっとも重要な部分をなしていると思う。

著者によれば、「ウァイトリングの批判は、本質的にユートピア主義者の道徳的立場に立って動く」のであって、その限りにおいて、フランス啓蒙思想のフーリェ主義と同じ程度における影響にもかかわらず、体制としての資本主義の認識と批判とにおいて欠けるところがあった。たとえば、私有財産をもって、労働と享楽品との不平等な分配の結果であり、人間による人間の搾取の象徴と考えるばかりでなく、戦争を導きいれる元凶であるとし、しかもそれが永遠不変の制度ではないとしているのは、正しいが、著者によれば、財産の蓄積と社会的生産の発展との歴史的関連、すなわち労働生産性の上昇のひとつの槓杆としての私有財産の役割をしていなかったという事実、不平等の歴史的根源を、生産の法則に求めずに交換の形態に求めたということ、従って高利貸資本および商業資本の役割を重視し、そのために、剰余価値法則を認識することができなかったことを著者が指摘しているのは面白い。これはウァイトリングの職人的・手工業的生産(＝問屋制家内工業)から精々マニュファクチュア生産の定礎期に生きたウァイトリングの時代的限界ともいえよう。

著者はさらに、ウァイトリングの社会主義思想を通じて、婦人への同情(S. 129)宗教の階級的性格(S. 135)などについて評価しながら、第三章階級闘争および革命においては、階級闘争の認識の不足、階級分析の欠如などについて鋭い批判を展開している(S. 139)。

最後の第三部ウィルヘルム・ウァイトリングの歴史的意義においては、科学的社会主義の出現を準備したその革命的な役割を指摘しながら、同時に、彼自身、近代的なプロレタリァートに移行しつつあった社会層の代弁者であり、その子供であったために、歴史の法則性、階級闘争の物質的基礎あるいはプロレタリァートの世界史的な使命などについて、充分な認識に到達することができなかった点を指摘している。

＊　＊　＊

本書は、わずかに二〇〇頁の本であるにもかかわらず、ウァイトリングおよびその当時のドイツ社会主義を識るための忠実な案内書ともいえよう。筆者自身ドイツ社会主義運動に手をそめたばかりであり、本書を批判する資格はないが、ただつぎの三つの点を読後感としてのべておこう。㈠本書はすぐれた分析であり、克明な研究であって、とくに、ウァイトリングの思想をフランス啓蒙思想とフーリェ主義およびバブーフの共産主義思想との関連において把握したことは興味深いが、ドイツ社会主義者との関係、例えばユング・ヘーゲリアンとの比較などがなされないのは、一寸手落ちのような気がするがどうであろうか。㈡それはまたドイツ労働運動にあたえた影響、その役割(もちろん断片的には教養団体＝Bildungsverein にたいする影響についてふれられてはいるが)にたいして、あまり関心がむけられていない点とも関係がある。㈢つまりウァイトリングの共産主義は、労働者階級との接触の上に樹立されたのであって、その意味ではマルクスやエンゲルス以外の他のドイツ社会主義者の誰よりも先んじていた。とすれば、ウァイトリングのドイツ社会主義運動史上における意義を正しく評価するためには、以上のような視角が必要ではなかろうか。

(1) Marx und Engels, Gesammelte Werke, Bd. 4. SS. 147—148.

(2) E. Kaler; Wilhelm Weitling, Seine Agitation und Lehre im geschichtlichen Zusammenhang dargestellt, 1887.

(3) Mehring; Die Geschichte der deutschen Demokratie, 2 Bde. 1961. H. Schlüter; Die Anfänge der deutschen Arbeiterbewegung.

(4) エンゲルス著、大内兵衛訳「空想から科学への社会主義の発展」(岩波文庫)二二頁。

——一九六一・九・一三・深更——

次号目次

論説

豊かな社会に於ける経済問題……千種義人

経済成長と設備投資……大熊一郎

資料

十九世紀末における
ドイツ独占資本と保護関税政策……飯田鼎

江戸近郊農村の農民負担に関する一考察……佐々木陽一郎

学界展望

インフレーション理論の展望……福岡正夫

書評

エリー・アレヴィ著
『トーマス・ホジスキン』……飯田鼎

ミシェル・フォントネ著
『ベイザンと農村のマルシャン』……渡辺國廣

川元英二著
『アメリカ退職年金制度』……庭田範秋

新刊紹介